

# 保育学生の「人間味」に関する一考察 — 実習以外で子どもとかかわること —

## One Consideration to Be Related to "The Thoughtfulness" of Students Learning Childcare

— The Interacting with Children Other Than Training —

栗岡洋美\*・加藤史恵\*\*・七原夏美\*\*

Hiromi KURIOKA, Fumie KATO, Natsumi NANAHARA

### 要約

本稿は、保育学生が実習以外で子ども達とかかわった事例を扱った実践研究である。けん玉遊びについての観察記録と学生の感想の聞き取りによって、実習では得られ難い「一人の人としてのかかわり」をもつことができたと分かった。このことから、実習後から就職の間に、一人の人として子どもとかかわる体験を加えることが、人間味豊かな保育者の育成につながることを示唆する一例を提示した。

### Abstract

This report employed an example that the student who learned childcare interacted with children other than training. By records and impressions of the students about having played with the KENDAMA, it was revealed that I was able to have "the interaction as one person" that was hard to be provided by the training. From this, I showed one example to do the thoughtfulness of students more wealthily to add an experience to be interacted with children as one person between finding a job after training.

### キーワード：

人間味、人間関係力、保育学生、実習以外

### Key words：

Thoughtfulness, Human relations power, Students learning childcare, Other than training

## I. 緒言 (問題・目的)

現行の幼稚園教育要領<sup>1)</sup>・保育所保育指針<sup>2)</sup>において、保育内容・5領域の中には「人間関係」の領域があり、子どもの人間関係に関する力の育ちを支える保育者は、子ども達の良きモデルとなる人でありたい。全国保育士会倫理綱領においても、専門職としての責務として、「常に自らの人間性と専門性の向上に努め」という文言が見られる<sup>3)</sup>。つまり保育者は、子ども達が安心感の中で、人に親しみをもって過ごすことができるような人的環境となることを、求められているのである。

このように、保育者に重要な資質として「人間

関係力」があるわけだが、保育者に限らず現代人の人間関係力は今後ますます低下していく傾向にあると危惧されており、神垣の言葉を借りるならば「領域『人間関係』の目指すものは、子どもにとっての課題であると同時に保育士養成校に在籍する学生にとっての課題でもある<sup>4)</sup>」といえるだろう。

図1は保育者の人間関係力を支える構成について筆者の考えを表したものであり、「人間味」を土台として、その上にさまざまな「コミュニケーションスキル」を身に付け、さらに保育の「専門知識」を備えることによって、より保育者として

\*本学専任講師, \*\*中京幼稚園教員

の人間関係力が養われることを示している。

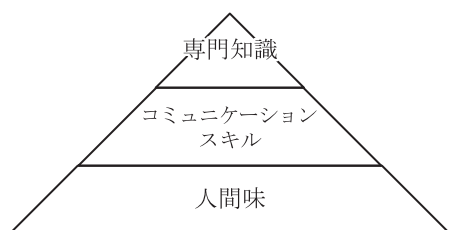


図1 「人間関係力」の構図

中京学院大学（以下「本校」と記す）では、現在、人間関係力を高めるためにコミュニケーションスキルの習得を目指して、グループワークなどが意図的に取り入れられている授業が多い。また、子どもの発達や子育て支援など保育にかかわる専門知識を学ぶ専門科目も揃えられている。それらに比べて「人間味」の育成に着目したカリキュラムは多くない。この傾向は本校に限られたことではなく、他の保育者養成校においてもいえることである。

国語辞典によると、「人間味」とは「人間らしいあたたかい気持ち、人間としての情の深さ」であり、「情」とは「思いやり」ということである<sup>5)</sup>。つまり、「人間味」とは人としての温かい気持ちや思いやりと捉えることができる。思いやりがなければ、かかわり方の技術や知識が備わったとしても本当の意味で人とつながることはできない。保育者の人間関係力に人を思う気持ちは必須であるものの、その部分については学生の気質やそれまでの生育環境に起因するとして、また、授業の中で扱うことが困難であることから、保育者養成校の中で課題とされている。

永野が2007年に「人間関係に関する研究は主として子どもの人間関係の変容、発達に関する研究と保育者の人間関係形成への援助、関わりに関する研究が中心であった」と報告している<sup>6)</sup>が、今後は保育者養成校の学生自身の人間味に関する研究が一層必要になっていくと考えられる。これに関する先行研究は、以下のようなものがある。

増田は、子どもや保護者とかかわりを実践的に学ぶ2回の講座（フィールドワーク）を設け

た。その講座から、学生が回数を重ねることとかかわりにおける満足感を感じ、そのことが環境等への配慮へステップを進めると記している。さらに、子どもとかかわる喜びの質が変化することにも言及している<sup>7)</sup>。長根は、実習における学生の「抱っこ」体験を調査した結果から、抱っこの重要性と人間関係にもたらす意味について述べている。そして「子ども好き」を主な動機として保育者養成校に入学した学生が、子どもへのあたたかい心遣いと保育者として子ども達と信頼関係を築こうとする姿勢をもつようになっていく変化を示している<sup>8)</sup>。このような研究の多くからは、実際に子どもとかかわる中で学生に感じさせるという共通点が見られる。

以上、筆者の「人間味」と「人間関係力」についての考えや保育者養成校における課題、先行研究を踏まえ、本研究では、保育学生が実習以外で幼稚園の子ども達と断続的なかかわりをもった事例から、「人間味」の育成の可能性を探りたいと考える。

## II. 実践の概要

### 1. 実践方法

本校には隣接して附属の幼稚園がある。この好環境を活かし、保育科学生のゼミ活動に幼稚園児との交流を取り入れた。ゼミ学生は2年生15名である。平成28年度の1年間を通して断続的に園を訪問し、子ども達とかかわりをもった。

### 2. 実践内容①

前期は、学生が4つのグループに分かれて絵本や体操、劇、パネルシアターなどさまざまな活動を考え、園の自由遊びの時間を利用して実践した。およそ週に1度のペースで順に実施し、担当のグループはPDCAサイクルの一連をおこなった。場所は園のホールで、対象は全園児、参加も出入りも自由とした。担当以外のグループは自由参加で見学や手伝いをしたが、主として2回、サポートとして1回は最低でも経験できるようにし

た。振り返り時には、撮影したビデオを使用し、学生が客観的な視点で考察をすることによって、次回に向けての自身の課題を明確にできるようにした。4～7月という時期や満3～5歳児までの年齢幅を考慮して、遊びの内容は主に学生側が主導で見せる内容のものが多かったが、クイズや体操など子どもと一緒に参加できる内容も加えるようにした。

#### 実践内容②

後期の10月から12月にかけて、絵本を読みながら各保育室に行った。学生を園の8クラスに割り当て、2～3名で訪問した。担当クラスの子どもの年齢に合わせた絵本や紙芝居を選ぶことや、園との日程調整は学生自身がおこなった。その他に、園内研究会時に学生が保育に参加する、ハロウィンの時期にそれにかかわる絵本や劇を見せるなど、変則的に子ども達とかわる機会ももった。

#### 実践内容③

年長児(2クラス計46名)が2月からけん玉遊びを始めることになり、学生も一緒に遊ぶ機会ももった。学生は前期にけん玉遊びを経験しており、全員が担当教員による検定「もしかめ」に合格している。「もしかめ」とは、「もしもしかめよ～」の歌に合わせて玉を大皿と中皿とで行き来させるけん玉の技の一つである。けん玉遊びにかかわる園への訪問は全て授業外の自主活動として実施した。

実践内容①②では、事前に計画や準備をした対面文化のやりとりを通したかわりが主であった。それに対して、実践内容③では計画や準備無しに、子どもの姿を受けてやりとりが展開されていった。本稿では、個々での直接的なかわりが最も多かったこのけん玉遊びを通したかわりについての事例を取り上げる。

### 3. 倫理的配慮

論文内で掲載する内容については、学生に研究の主旨を口頭と文書で説明し、同意する場合のみ同意書への署名をお願いした。

## Ⅲ. 結果

### 1. 観察記録と学生の感想

#### ①2月6日 学生のけん玉披露

けん玉遊びを通したかわりについて、事前に双方の教員が打ち合わせをする中で、学生のけん玉姿を子ども達に見せることから始めることを決めた。学生にけん玉披露のことを1週間程前に伝えたとこ、「えーっ」と言いながらもすぐに練習を始めていた。

当日は、ゼミ生11名が子ども達の前で一斉に「もしかめ」を披露した。各保育室で2回ずつ見せたが、2回目は早いテンポで実施した。子ども達は学生の姿に見入っており、終わると「すごい！」と歓声や拍手が上がった。途中から自然に子ども達の歌声も聞こえ出し、学生の姿を応援している様子であった。特に2回目の速さに驚いていた。

学生が披露した後、すぐに自分のけん玉を持ってきて学生の近くで遊び始める子が見られた。それまで子ども達は、けん玉が手元にあっても遊んでいなかった。学生に「やってみて！」と言う子や「見てて」と挑戦する子がおり、学生も個々に声をかけながら楽しい時間を過ごした。教員が安心して見ていられるほど、学生は子ども達と自然なかわりかたちでかわっていた。大学に戻る際、子ども達から「また来てね」「今度は(今、頑張っている)劇を見に来てほしい」という声が聞かれた。  
[学生の感想]

- ・とても楽しかった。
- ・(けん玉披露は)緊張したけれど真剣に見てくれて嬉しかった。
- ・2回目にテンポを早くしたら「すごい」と驚いてくれて、見せてよかったと思った。
- ・一緒に歌ってくれて嬉しかった。
- ・子ども達がけん玉をしているときの必死さがかわいかった。

#### [考察]

学生は、子ども達にけん玉を披露するということを事前に知ったことによって、「できる姿」「カッコいい姿」を見せたいという気持ちからモ

チバージョンが上がり、自主的な行動へとつながった。そのときには、子ども達の姿を思い描いていたと考えられる。「上手だと思ってくれるかな?」「びっくりするかな?」と相手のことを察しながらけん玉の練習に励んでいたのではないかと推測する。そこには、実習生としての評価ではなく、一人の人としての見られ方やプライド、子どもへの思いが見え隠れしていた。

そのような姿に対して子ども達が、歓声や拍手、歌で応えてくれたことによって、学生の気持ちや行動が目に見えるかたちで価値付けられ、そのことが学生にも伝わったと考えられる。緊張して披露していたにもかかわらず、子ども達の反応を学生はしっかりと受け取っていたことを感想からも読み取ることができる。

また、4月からかかわりを積み重ねてきたことによる安定感や、短大での学びをほぼ終えた時期で習熟度が高いことが、自然なかたちでのかかわりにつながったのではないかと考える。

#### ② 2月7日 けん玉披露翌日の様子

自由遊びの時間に、両クラスともけん玉で遊ぶ子はいなかった。ただ、「おねえさん達、今度いつ来るの?」と担任に聞いてくるなど、学生がまた来ることを子ども達は待っている様子であった。

そのことを学生に伝え、自主参加でまた幼稚園に遊びに行くことを呼びかけた。

#### ③ 2月8日 学生、2度目の訪問

午後の自由遊びの時間に学生2名が40分間ほど遊びに行った。学生がけん玉で遊び出したところ、子ども達も自分のけん玉を持って集まってきた。2、3人から始まり、入れ替わりも含めて15人程が学生の周りに来てけん玉で遊んだ。

[学生の感想]

- ・一昨日遊んだときよりもできるようになる子が多かったと感じた。
- ・子ども達の夢中になっている姿に圧倒された。
- ・授業の都合で途中で帰らなければいけなかったため残念だった。

- ・時間がなくて、「見て!」と言う子ども達に十分に応えてあげられなくて辛かった。
- ・子ども達とけん玉以外のことも会話ができて楽しかった。

[考察]

子ども達が自ら集まってきてくれたことから必要感を得たこと、一昨日からの上達を感じて援助の可能性に魅力を感じたことが、時間が足りないことを嘆くほど、子ども達とのかかわりを求める気持ちにつながったのではないかと考える。そして、学生の中に、子ども達の一生懸命な姿を「できた」喜びへとつなげてあげたいという思いや、子ども達のためにもっと何かをしたい、できるのではないかという思いがこみ上げていることが感じられる。

#### ④ 2月15日 学生、3度目の訪問

午後の自由遊びの時間に学生8名が1時間ほど遊びに行った。学生は以前よりも上達した子ども達の姿に驚いている様子だった。「わあ～、みんな上手くなったね～。」「すご～い!」「やってみて、やってみて」などと子どもに声を掛け、拍手をしたり笑い合ったりしていた。また、学生同士で「〇〇ちゃん、めちゃうくちゃすごいやん」と上達ぶりの目覚ましい子を見合ったり、「△△ちゃん、もう少しでできそうなんだけど…」と他の学生に援助方法の相談をしたりする姿も見られた。玉が皿に乗らない子に対して何とか乗るようにしてあげたいと、必死にアドバイスをする学生の姿が多く見られた。子ども達は、まだ「もしかめ」はできないが、大皿に乗るようになったことを喜んで学生に見せていた。

[学生の感想]

- ・こちら名前を覚えてきたのでかかわりやすくなった。
- ・実習や仕事とは違ってリラックスして子ども達とかかわることができるので、とても楽しい。
- ・実習のような気負いが無い分、変に考えすぎずに子ども達と接することができるし、素直に子どもの反応を嬉しいと感じられる。



- ・自分達が行くと子ども達がすごく喜んでくれて、その姿がとてもかわいい。
- ・自分が一緒に遊ぶ中でその子ができるようになって喜んでいて自分もとても感動する。
- ・実習のときは「声を掛けなければ」「援助をしなければ」と考えすぎてしまうが、ここでは普通に遊んだり話したりできるから楽しい。

〔考察〕

少し日が空いたが、とても自然なかかわりが見られ、子ども達に声を掛けるときも頭で考えるのではなく、感じたままの言葉が出てきている。学生は、自身について、実習のときとのかかわり方の違いに気付いており、本来の自己表現を取り戻した。さらに、自分の中に自然に沸き起こる子どもをかわいいと思う純粋な気持ちを、再認識することができた。

「実習生として」「保育者として」の義務感や責任感、使命感がなかったことによって、直接的な気持ちの表現によるやりとりがなされ、そのことがさらに子どもへの思いを膨らませることにつながったのではないかと考える。

また、学生同士で自由に話をしても良い雰囲気があったために、子ども達の前で学生同士が親しくかかわっていた。それは、子ども達にとって良い環境となったであろう。

⑤2月17日 観劇

子ども達から、1週間後に控えた発表会時におこなう劇を見に来て欲しいと誘われ、学生13名が園を訪れた。2クラスを順にまわり、午前中1時間ほどの滞在となった。学生は、子ども達が楽しそうに劇遊びをする様子を見て、一緒になって楽しんでいて、学生から所々で「すごい」「上手」などのつぶやきや拍手、笑い声が聞こえ、終始和やかな雰囲気であった。

〔学生の感想〕

- ・とにかく楽しかった。
- ・小さい声で子ども同士声を掛け合っているのが聞こえて、かわいかった。
- ・子ども達が楽しそうにやっていたので、こちら

も楽しい気持ちになった。

- ・一生懸命な姿に感動した。
- ・「今度いつ来るの?」という質問攻めにあった。返事に困ったけれど嬉しかった。

劇を見た後、子ども達がけん玉を持ってまた学生の近くに来た。学生は、前回来たときよりもさらに上達した子ども達の姿を見て、「わあー」「すごい」と歓声をあげて驚きを表していた。その学生が発する素直な驚きが、子ども達のさらなる「やる気」を誘ったようで、「見て!」と学生に見せたがる子どもの姿が多く見られた。1対1または1対2の対応で、密接したかかわりをもった。

この日の午後、学生がイベントで使用した手作りの机を、園に寄付するために再度訪れたところ、子ども達がまた「けん玉、見て!」と寄って来た。学生は時間の許す限り、拒むことなく子ども達の姿を見て「すごいね」「うまい!」などと声を掛けていた。

〔考察〕

実習中に、子ども達が発表会に向けて劇遊びなどをする様子を見ることもあるが、今回は実習生としての学びの姿勢ではなく、観客として劇を楽しむ姿勢のみで見ることができた。そのことで、学生の自然な反応や感想が表れたのではないかと考える。張り詰めた緊張感の中ではなく、和やかな雰囲気の中であったからこそ、子どもも自然な姿で表現することができたとし、学生もさまざまな子どもの姿全てを温かく受け止めていた。

⑥3月17日 子ども達のけん玉披露

学生がけん玉を披露したように、今度は子ども達が披露をするということになり、観劇から1ヶ月後、再び学生14名が園を訪問した。給食後の自由遊びの時間に、40分間ほどの滞在であった。学生達は、「うちらより上手になっとなるかもよ。」などと子ども達の上達ぶりを楽しみにして、園に向かった。園に入ると、玄関まで迎えに来る子や待ちきれずに廊下でけん玉を見せ始める子がいて、学生はそのような姿を微笑ましく見ていた。

保育室に入ると、簡易ステージが作られており、子ども達がそこでBGMに合わせてそれぞれ自分が得意とする技を披露した。学生は、玉を大皿と中皿とで行き来させたり、途中で小皿への移動も入れたり、手作りのカップけん玉を見せたりするなど、多種多様な子ども達の姿を見て楽しんでた。中には、けん玉の域を超えて、ダンスや恐竜パネルでの演出をする子や、ままごと遊びの世界から学生にお茶を出してくる子もいた。学生はそれらの姿を見守りながら、感動して涙を流したり、同じように体を揺らしたり、心配そうにうなずきながら見たり、笑いながらおもてなしを受けたりしていた。

[学生の感想]

- ・この1ヶ月の子ども達の変化にとっても驚いた。
- ・子どもがもつ力の偉大さを実感した。
- ・一番初めに一緒に遊んだ子がすごく上手になっていて、感動した。
- ・始まってすぐに感動して泣きそうになった。
- ・時間があつたらいつまでも続けそうで、ずっとやっている姿がすごかった。

訪問を重ねるごとに子ども達とのかかわりが密になり、子ども達が学生の訪問を楽しみに待つように学生も子ども達に会うことを楽しみにするようになった。学生にとっては、卒業式前日の忙しい日であったが、14名ものメンバーが参加した。

[考察]

今回の一連の取り組みは、授業外の自主参加の活動であったにもかかわらずこれだけの学生が参加したということは、単に子どもの成長が見たいということだけではなく、何度も実際にかかわる中で生じた、学生が子ども達を思う気持ちと子ども達が学生を思う気持ちの相互作用の積み重ねによるものであると思われる。

今回の一連の活動で学生が見せた表情は、実習でのそれと異なっていた。学生から実習時の自分について、「実習園の先生方の視線を気にしてしまう」「正しい援助ができていないか不安に思いながら実習をしている」という内容の話を聞くこと

が少なくないことから分かるように、実習中は緊張しているからだけではなく、実習生としてのかかわりを意識するあまり、人としての感覚や表現が妨げられてしまっているのではないかと考えられる。

## 2. 成果と課題

### ①学生側（大学）の成果

- ・「実習生として」「保育者として」という立場に囚われなかったことで、一人の人としての自然な反応によるかかわりができた。それによって実習園からの評価による認めではなく、子ども達からの応え（姿）によって存在や行動に対する価値づけを得ることができた。さらに、無意識に沸き起こる子ども達への思いが、保育者になる自信や自己肯定を促した。
- ・1つの遊びを通したかかわりを積み重ねたことによって、遊び、物、気持ちを子ども達と段階的に共有し、体験することができた。「けん玉」という遊び・物が媒体となったことで子ども達への思いが定まり、そのことが直接的な気持ちのやりとりにもつながった。
- ・断続的なかかわりをもったことによって、期待や予想が膨らみ、その分子どもの変化や言動への感度が鋭くなった。

### ②子ども側（園）の成果

実習生とは違って、次にいつ来るか分からないという曖昧さが、より子ども達の期待を膨らませていた。実際にかかわった時間は短くても断続的に長い期間でかかわったことにより、やりとりを充実させることができた。

### ③課題

学生が訪問できる時間と園での遊びの時間を合わせることが難しかった。時期や時間の検討や調整を計画的におこなう一方で、両教員が子ども達と学生の姿を密に交流しながらお互いの状態に合わせて柔軟に進めていく必要がある。

#### IV. まとめ

ほとんどの学生は、けん玉が全くできないところから4ヶ月ほどかけて「もしかめ」ができるようになった。自分達も悔しい気持ちや諦めなくなる気持ちを経験しているだけに、自然に子ども達に感情移入したのだろう。そして、できるようになったときの喜びや達成感の快感も知っているからこそ、あの気持ちを子ども達にも味わわせてあげたいと思ったのではないかと考える。

今回の活動の成果より、学生の間味をより豊かにするための大学入学後のプロセスをモデル化したものが図2である。

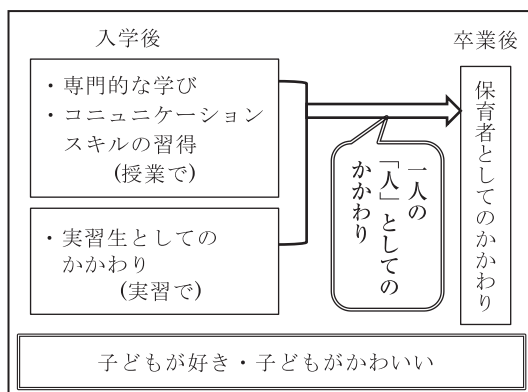


図2 「人間味」の育成プロセス

「子どもが好き・子どもがかわいい」という子どもに対する愛情を基盤として、大学入学後は、授業において専門的な学びを重ねるとともにコミュニケーションスキルの習得を目指す。そして実習においてその学びを身につける。実際に子ども達とかかわる中で改めて「子どもが好き・子どもがかわいい」の気持ちを再確認する学生も多いだろう。その“学び”の中でのかかわりを経て卒業後に「保育者としてのかかわり」へと成長していくわけであるが、その間に今回の活動のような「一人の人としてのかかわり」を加えることが重要な意味をもつと考える。「～でなければならぬ」という保育者に求められる資質はもちろん大切である。しかし、それだけで固められた保育者ではなく、人として純粋に子どもの言動をおもしろいと感じたり子どもの中にある力に感動したりできる“純心な感性”が大切なのではないだろう

か。専門的に学んだ後であるからこそ、このインターバルは特別な意味を成す。“子どもに寄り添う”保育とは、本来、寄り添うように指導されて努めるものではなく、自然に自分から子どもの心に近づいていきたくなったり、子どもの喜怒哀楽を自分のことのように思ったりする衝動的な反応であると、今回の学生の姿が教えてくれたように思う。

#### 謝辞

本研究に御協力いただきました、ゼミ生の皆様に深く御礼申し上げます。

#### 【文献(引用文献)】

- 1) 文部科学省:平成20年告示第26号
- 2) 厚生労働省:平成20年告示第141号
- 3) 全国保育士会:平成15年策定
- 4) 神垣彬子:"保育士養成校における領域「人間関係」の授業形態についての研究(中間報告)", 発達研究:発達科学研究教育センター, pp.225-227, 2009
- 5) 国語辞典:旺文社, 改訂新版(1986)
- 6) 永野泉:"保育内容「人間関係」に関する研究の動向", 淑徳短期大学研究紀要第46号, pp.33-42, 2007
- 7) 増田吹子:"子どもとのかかわりを通じた学生の学び", 鹿児島純心女子短期大学研究紀要第44号, pp.37-47, 2014
- 8) 長根利紀代:"保育者養成における領域「人間関係」についての一考察", 名古屋柳城短期大学研究紀要第19号, pp.117-143,1997